

彙 報

国際学会ニュース
News of International Conference

1. 第9回国際モンゴル研究年次大会

The 9th Annual International Mongolian Studies Conference

二 木 博 史 (東京外国語大学)

FUTAKI Hiroshi (Tokyo University of Foreign Studies)

2015年5月8日、9日の両日、ワシントンD.C.の在アメリカ合衆国モンゴル大使館を会場にモンゴル研究の国際会議が開催された。モンゴル文化センター(The Mongolian Cultural Center)が主催して毎年ひらかれている学会で、ことしは9回めとなる。M. Saruul-Erdeneが代表をつとめる同センターはアメリカに居住するモンゴル人が組織しているもので、モンゴル文化の紹介のほか、モンゴル人の子どもたちを対象としたモンゴル語の講習などもおこなっている。背景には、3万ちかいといわれるモンゴル人コミュニティの存在がある。この会議は在米のモンゴル人が一堂に会する機会にもなっており、モンゴルの主要なメディアも取材した。

5月8日の午前10時に開会し、最初に駐米モンゴル大使B. Altangerelが祝辞をのべ、つぎにサロールエルデネが会議の趣旨を説明した。午前の第1セッション(歴史)はサロールエルデネが司会をつとめ、3名が報告した。J. Urangua(モンゴル国立大学)は、「モンゴルの貴族にあたえられた爵位と称号——17世紀から1920年代まで」と題する報告で、清代の爵位と称号の種類、爵位ごとにさだめられた礼服について説明し、その制度が独立モンゴル王国にどのようにうけつがれたかを論じた。わたし(二木)は「新発見の1891年のザサグト・ハン・アイマグ地図」という報告で、同地図が同アイマグの政治、文化、社会の研究にどのように利用できるかについてのべた。Ch. Badmaarag(モンゴル国立大学)「市民の倫理の変化——モンゴル人と日本人の比較」は、モンゴルと日本の各時代における倫理観を比較。

午後の第2セッション(現代モンゴル社会)はD. Gansükh(モンゴル大使館公使)の司会で、3名が報告した。全員が独立モンゴル研究所(Independent Research Institute of Mongolia)所属の研究者である。この研究所は2008年に設立されたNGOで、国家セクターのプロジェクトの評価などをおもな業務とする。Z. Manlaibaatar「モンゴルにおけるジェンダーの平等に対する態度」は、Swiss Development Cooperationがスポンサーとなり2013年にオラーンバートルと10県の1500名を対象におこなった、一夫多妻など8項目の調査にもとづいている。この調査はレバノン、ヨルダンなどでもおなじ方法で実施された。結論としては、モンゴルではジェンダーによる差異はそれほどつよくないが、都市と農村ではことなる態度がみられるという。N. Yanjinpagma「モンゴルの農村の家族の社会経済的基礎調査」は、Mercy Corps MongoliaとUSAIDの依頼で15の県の1550名を対象にした調査の分析。農

村の家族の年平均収入は429,000トゥグルグ、同支出は478,000トゥグルグで、53.4パーセントは野菜の栽培が収入をふやす最善の方法と回答した。N. Minjirmaa「モンゴルの公衆衛生部門における賄賂の授受」は、The Asia FoundationとUSAIDの依頼で2014年にオラーンバートルの18の病院で実施した医師・看護婦に対するおくりもの実態調査についての報告。55パーセントの患者は、過去1年間に医師・看護婦に金銭あるいはおくりものをわたしたと回答。69パーセントの患者は、おくりものが医療サービスの向上につながると回答したのに対し、87パーセントの医師・看護婦はサービスの向上にはつながらないとこたえているという。この問題の背景には、医師・看護婦の給料のひくさがある。

ティー・ブレイクのあとの第3セッション(文献学)は、ロシア科学アカデミーのL. Badmaevaが司会をつとめ、3名が報告した。S. Wickhamsmith(ラトガーズ大学)「Ts.オイドブのモダニズム詩」は、モンゴルの国旗のデザインで有名な彫刻家オイドブの*khos uyanga*、すなわちカリグラフィック的な絵とみじかい写象主義的(imagistic)な詩のくみあわせからなる作品の分析。モンゴル教育大学のS. Khövsgölの報告「月郭公の物語のチベット語版小説とモンゴル語版戯曲の比較」は、有名なダンザンラブジャー5世作の戯曲を原作のBlo bzang bstan pa'i rgyal mtshan作の小説と比較し、ダンザンラブジャーが独自の作品にしあげたことを論証した。P. Marzluf(カンザス州立大学)の「ピオネール、識字能力と社会主義時代のモンゴル人の生活」は、the University of Cambridge Oral History of Twentieth Century Mongoliaに収録された30人のインタビューをもとに、ソ連からモンゴルにはいつてきたピオネールという組織が、あたらしいモンゴル人像をうみだすのにきわめて重要な役割をはたしたことについて論じた。

ふつかめの5月9日の午前中の第4セッション(21世紀のモンゴル人のアイデンティティ——宗教と言語)は、R. Taupier(マサチューセッツ大学アマースト校)の司会ですすめられた。A. Rubin(ワシントン大学)「回帰する精霊、21世紀のオラーンバートルのブー・ムルグル」は、オラーンバートルのトルゴイト地区でおこなったフィールドワークにもとづき、シャマニズムの復興を政治的、文化的、宗教的抑圧の時代のあとの個人のアイデンティティの回復に関連づけて説明した。最近、国外でも積極的に研究活動をおこなっているI. Garri(ロシア科学アカデミー・ブリヤート支部)は「ブリヤート・モンゴル人の宗教的アイデンティティ」という報告で、仏教、シャマニズムがブリヤート人の民族アイデンティティの重要な構成要素になっていることを説明。J. Nathan(セント・ノーバート・カレッジ)「モンゴル——起業、文化、地域的差異」は、モンゴル各地で実施した質問調査にもとづき、モンゴル人の起業や教育に対するかんがえを分析。ロシア科学アカデミー・ブリヤート支部所属のL. Badmaeva「モンゴル諸言語のコーパスの現状」は、コーパス言語学の立場からのモンゴル語の研究の状況をのべ、ウェブ上に公開されているモンゴル語、カルムイク語、ブリヤート語のコーパスを紹介。

午後の第5セッション(文化)では、3名が報告した。ケント州立大学のS. Yoonは「モンゴル国外のモンゴル伝統音楽の音源とコレクション」は、社会主義時代のSmithsonian Folkwaysやユネスコによる記録、民主化後の商業的録音などのモンゴル国外の伝統音楽資料を今後の研究に利用していく方法を検討。中国・内モンゴルのČoytu(前フフホト民族学院教授)「遊牧文化における土地、郷土、牧地について」は、遊牧社会における土地と人間と家畜の関係について考察。M. Saruul-Erdeneは、「モ

ンゴル文化センター特別報告——9年間の回顧」と題して、同センターの過去9年間の活動を紹介し、総括した。

ティー・ブレイクのあとの最後の第6セッション(西モンゴル)は、わたしが司会をつとめ、3名が報告した。マサチューセッツ大学アマースト校のR. Taupierは「1640年のモンゴル・オイラト大法典」と題する報告で、同法典が同時期のヴェストファーレン条約(1648年)に匹敵する重要性を有すると強調し、まもなく英訳を発表すると予告した。カザフスタンのM. Ainashbekova「モンゴルのカザフ人」は、社会主義時代のバヤンウルギー県の建設、カザフスタン独立後の移民、バヤンウルギー以外のカザフ人コミュニティ(ナライハ、トゥンヘル、ダルハン、エルデネト)の状況についての報告。ロシア連邦トゥワ共和国のトゥワ人文・応用社会経済研究所のA.S. Dongakは、報告「トゥワと西モンゴルの歴史に関する伝説・口碑のサイクル」で、トゥワの民間説話のなかの神話(*burun-chugaa*)、伝説(*toolchurga chugaa*)、史話(*toogu chugaa*)、実話(*bolgan tavarylga*)について、それらの収集と研究の歴史をくわしくのべるとともに、西モンゴルのフォークロアとの類似性を指摘した。

アメリカのモンゴル研究では、インディアナ大学に事務局をおき、雑誌*Mongolian Studies*を刊行するthe Mongolia Societyがよく知られているが、在米のモンゴル人がイニシアチブをとるあたらしい研究のながれがうまれつつあることは、注目されよう。

2. 国際シンポジウム「20世紀前半におけるモンゴル語定期刊行物研究」

International Symposium “The Studies of Mongolian Periodicals Published in the First Half of 20th Century”

フフバートル(昭和女子大学)

Borjigin HUIHBATOR (Showa Women's University)

2015年5月15日、昭和女子大学本部館3階中会議室で同大学国際文化研究所主催国際シンポジウム「20世紀前半におけるモンゴル語定期刊行物研究」が行われた。まず開会のあいさつをした東南アジア考古学専門の菊池誠一副所長が昭和女子大学国際文化研究所でベトナム研究を中心に研究活動が進められてきたこと及びモンゴル研究の進展により本研究所のアジア研究に大きな広がり生まれつつあることを紹介した。本研究所主催モンゴル研究関連の国際シンポジウムは2012年11月の「中国の経済発展と少数民族の文化的変容」に続き、今回が2回目となる。ちなみに、日本モンゴル学会春季大会が昭和女子大学で2回(2007年と2012年)行われている。

続いて、フフバートル(昭和女子大学)が本シンポジウム開催の趣旨ときっかけを説明し、日本でこのような国際シンポジウムを開催した背景について触れた。本国際シンポジウム企画のきっかけは、昭和女子大学国際文化研究所の所員フフバートルが研究代表者であった科研費(基盤研究C)「20世紀前半に現在の中国領内で刊行されたモンゴル語定期刊行物の研究」の終了にあたり、同研究所の予算でこのような国際会議を開催することが可能になったからだった。企画当初は、科研費の題名にしたいが、20世紀前半に「中国で刊行された」モンゴル語定期刊行物に焦点を絞った小規模のワークショップの開催を考えていたが、これまでの調査でウランウデ市の各資料館に現在まであまり知られていなかったモンゴル文字の定期刊行物が数種類保存されていることを知り、その詳細についてぜひ現地の研究者に報告してもらおうよう、ロシア連邦のブリヤート共和国から、また、1910年代までモンゴル語定期刊行物を一部共用していたモンゴル国からも研究者を招いた。本国際シンポジウム開催の目的は、モンゴル研究において貴重な資料となった20世紀前半に刊行されたモンゴル語定期刊行物についてのすべての研究実績を生かし、モンゴル語出版物自体が少なかった20世紀前半におけるモンゴル語定期刊行物の文献資料としての価値を広く知らせ、世界規模における調査研究と保存及びその人文社会研究への活用を促すものであった。

研究発表の午前部は二木博史(東京外国語大学)の司会でモンゴル科学アカデミー歴史研究所のチョロン(S.Chuluun)の「モンゴル国最初の出版物——*Sin-e toli kemekü bičig*という雑誌について」で始まり、本誌が刊行された歴史的背景、目的、内容及び発表者による世界各地での調査や保存状況についての報告、そして、保存と利用に関する提案がなされた。通訳は京都大学大学院のブレンだった。次の発表が内モンゴル大学(中国)のオヨン(烏雲)の「南京国民政府発行モンゴル語定期刊行物及び世論研究」だったが、発表者が欠席のため、日本語に翻訳した昭和女子大学大学院のアルタンホールが代読した。南京政府がモンゴル統治のために刊行した数種類のモンゴル雑誌の発行状況や宣伝内容とその目的についての分析だった。続いて、ロシア連邦ブリヤート国立大学のジャルガル(Zhargal.Badagarov)が「20世紀初期のブリヤート・モンゴルの定期刊行物」という題で発表し、

ブリヤート・モンゴル語で定期刊行物が刊行されるようになった時代背景を分析したうえで、1895年11月11日にチタで刊行された *Jegün jüg-ün bayidal* (*Zhiznj na vostochnoj okrajine*) をはじめとするブリヤート・モンゴルで刊行された約30種類にわたるモンゴル文字(一部ラテン文字)の新聞雑誌を10月革命前後に分類して紹介した。最後に調査と保存の意義を強調し、今後の共同研究を提案した。通訳は昭和女子大学大学院のハスだった。

午後の研究発表の前半はフフバートルの司会で桜美林大学のバイカルが「戦前の日本に駐在していたモンゴル人による定期刊行物」について、戦前の日本と内モンゴルとの政治的関係を述べ、モンゴル人留学生たちが発行した数種類のモンゴル語定期刊行物を紹介し、所蔵状況などを報告した。次いで、西北民族大学(中国)のチョイダシ(喬旦德爾)が「中国西部モンゴル(甘肅・青海)最初のモンゴル語定期刊行物」について報告し、1973~1990年に刊行された13種類のモンゴル語定期刊行物について紹介した。本シンポジウムでは中国西北部モンゴルの定期刊行物に関しては「20世紀前半」に限定しなかった。その次、中央民族大学(中国)の趙麗芳が「モンゴル語定期刊行物——その歴史と機能」という題でメディア論と中国における少数民族定期刊行物研究の視点から発表した。その後、休憩を挟み、司会がバイカルに変わって、内モンゴル大学のナヒヤ(娜荷芽)の「蒙民厚生会、蒙民裕生会、蒙民振興会の設立とその活動に関する一考察：『青旗』紙を中心に」が発表者欠席のため、昭和女子大学大学院のアルタンチメグによって代読された。モンゴル定期刊行物自体の研究ではなかったが、1940年代に満洲国で刊行されていたモンゴル語新聞 *Köke tuy* (青旗)の定期的メディアとしての資料上の価値を最大限に活かしての研究である。続いてフフバートルが「中国領内発行古いモンゴル語定期刊行物(1905~1950)カタログ」作成報告を行い、カタログ作成の経緯と進捗状況及び近年アメリカとロシアで行った調査内容を中心に説明した。これで研究発表が終了し、司会が李守(昭和女子大学)になり、田中克彦(一橋大学名誉教授)が「モンゴルと定期刊行物」という題で特別講演を行った。モンゴル語の歴史において新聞が出はじめたことはもっとも注目すべきであった。しかし、その時代にいったいどれだけのモンゴル人が新聞が読めたのだろうか。ラムステットは古典語の研究者であったが、民衆のことばも研究し、モンゴル語の定期刊行物を集め、ラテン化も考えた。新聞は社会の新しい変化、文学、政治評論を反映する道具として発展し、読者層を増やしてきた。社会言語学はこれについても注目すべきであるという内容だった。その後、フフバートルの司会兼通訳で全体討論が始まり、フロアから質問や問題提起がなされ、感想や意見が述べられた。具体的には、当時の読者の反応、新聞の黙読と近代的読者の誕生との関係、定期刊行物の刊行と印刷機、土地問題に対するブリヤートと内モンゴルのモンゴル語定期刊行物の反応に見られた共通点などについて討論があった。最後に二木博史が総括し、それぞれの発表について具体的コメントを述べたほか、定期刊行物についても説明を加え、20世紀前半にモンゴル各地で刊行されたモンゴル語定期刊行物がモンゴルのネイション形成に果たした役割と意義について論じた。

モンゴル語の定期刊行物の研究に焦点を絞った国際会議は、懇親会で音頭をとった田中克彦が述べたように「世界で初めての試み」で、その背景に日本には他国に所蔵が確認されていない貴重なモンゴル語定期刊行物が多く所蔵され、それについての調査研究が1990年代半ばころから始められ、急進展したことがあった。このシンポジウムではその研究にかかわった日本にいるすべての研究者を総動員できるよう連絡してきたが、開催日が平日であったため発表や参加を断念せざるをえな

った人たちもいた。参加者は日本各大学のモンゴル研究者たちを中心に45名の登録があった。閉会のあいさつは企画者のフフバートルが述べ、総司会は昭和女子大学の粕谷美砂子であった。

3. 国際学術会議「オンドゥル・ゲゲーン・ザナバザル——生涯と遺産」

The International Conference “Undur Gegeen Zanabazar: His Life and Heritage”

松 川 節(大谷大学)

MATSUKAWA Takashi (Otani University)

2015年5月29日、モンゴルの初代ジェブツンダムバ・オンドゥル・ゲゲーン・ザナバザルの生誕380周年を記念して、モンゴル国ウランバートル市の国家宮殿とモンゴル科学アカデミー本部ビルにおいて、国際学術会議「オンドゥル・ゲゲーン・ザナバザル——生涯と遺産」が、モンゴル科学アカデミー歴史・考古研究所の主催、生誕記念国家委員会とオヴォルハンガイ県知事官房の後援により開催された。

会議に先立ち、関連行事として、5月28日の10時よりザナバザル記念造形芸術博物館にて、「ノミン・イフ・フレーの発見——サリダギーン・ヒード調査」展示の閉幕式が挙行され、続いて11時よりボグド・ハーン宮殿博物館にて、「モンゴル磁器芸術におけるオンドゥル・ゲゲーン・ザナバザルと仏像」展の開幕式が挙行された。

5月29日09:30より政府宮殿大ホールにてS. Chuluun チョローン・モンゴル科学アカデミー歴史・考古研究所長の司会で開会式が挙行され、開会挨拶がTs. Elbegdorj エルベグドルジ大統領(代読)、Z. Enkhbold エンフボルド国会議長、D. Lundejantsan ルンデージャンツァン国会議員、B. Enkhtuvshin エンフトゥブシン・モンゴル科学アカデミー総裁、R. Gonchigdorj ゴンチグドルジ国会副議長・アカデミー会員によってなされた。続いて基調講演5本がなされた。

- ◆J. Boldbaatar ボルドバートル(モンゴル科学アカデミー歴史・考古研究所)「オンドゥル・ゲゲーン・ザナバザルの政治・社会活動」
- ◆S. チョローン「オンドゥル・ゲゲーン・ザナバザルとロシアの関係——使節・文書・研究」
- ◆Yu. I. Elikhina エリーヒナ(ロシア連邦・エルミタージュ国立博物館)「エルミタージュ博物館所蔵のモンゴルの仏像と仏画」
- ◆G. Purevbat プレブバト(モンゴル国・文化功労者)「オンドゥル・ゲゲーンの“化身芸術”」
- ◆R. Otgonbaatar オトゴンバートル(モンゴル科学アカデミー言語文学研究所)「ソヨンボ・方形文字研究の諸問題」

11:15より二つに分かれて分科会が開催された。

分科会A

テーマ1：「オンドゥル・ゲゲーン——政治・文化的功労者」

- ◆B. Oyunbilig オヨーンビリグ(中国・人民大学)「17世紀ハルハの政治史に対するオンドゥル・ゲゲーンの貢献——ツェツェン・ハーンの継承を例として——」
- ◆A. Ochir オチル(モンゴル国・国際遊牧文明研究所)「オンドゥル・ゲゲーン・ザナバザルの出自」
- ◆D. Enkhtsetseg エンフトゥツェグ(モンゴル国立大学)「ハンドジャムツ妃について」
- ◆S. Dulam ドラム(モンゴル国立大学)『「オチルダラ・ボグド・ゲゲーン三化身伝」という写本のオ

ンドゥル・ゲゲーン伝に関する固有の情報」

- ◆A. Alimaa アリマー(モンゴル科学アカデミー言語文学研究所)「モンゴル口承文芸におけるオンドゥル・ゲゲーンの形象」
- ◆Kh. Tserenbyamba, U. Sarantuya ツェレンビヤムバ・サラントヤー(モンゴル国・ザナバザル美術館)「ザナバザル美術館所蔵のオンドゥル・ゲゲーンの肖像画」
- ◆J. Saruulbuyan サロールボヤン(モンゴル国・文化功労者)「社会主義時代に造られ続けたオンドゥル・ゲゲーン像」
- ◆L. Altanzaya アルタンザヤー(モンゴル国・教育大学)「オンドゥル・ゲゲーンが下賜した若干の称号について」
- ◆B. Bayarsaikhan バヤルサイハン(モンゴル国立大学)「オンドゥル・ゲゲーン・ザナバザルとモンゴル法制史の原資料」
- ◆Sh. Soninbayar ソニンバイヤル(モンゴル国・ガンダン寺学術文化研究所)「ゲルグ派の教えの布教者としてのオンドゥル・ゲゲーン」
- ◆B. Darambazar ダラムバザル(モンゴル国・“ツォクト・ツァギーン・フルデン”文化センター)「ガンジョール・ダンジョール研究におけるオンドゥル・ゲゲーンの貢献」
- ◆T. Sainjargal サインジャルガル(モンゴル国・国立文書総局)「モンゴル国中央文書館所蔵ジェブツンダムバ・ホトクト関連歴史文書」

テーマ2 : 「17～18世紀のモンゴル仏教」

- ◆L. Terbish テルビシ(モンゴル国・科学功労者)「ジャムバルドルジ・ノミーン・ハン治世の祈願文2件(訳註)」
- ◆D. V. Ivanov イワノフ(ロシア科学アカデミー・ピョートル大帝人類学民族学博物館)「民族学人文学博物館のモンゴル・コレクションの仏教関係品——収集と概要」
- ◆E. Ravdan ラブダン(モンゴル国立大学)「仏教祈祷書・祭祀文書にあらわれる地名について」
- ◆Ts. Otgonbayar オトゴンバイヤル(モンゴル国ガンダン寺)「オンドゥル・ゲゲーン・ザナバザルとハルハのザヤ・バンディタ・ロブサンペレンレイの法縁」
- ◆P. Chultemsuren チュルテムスレン(モンゴル国・国際遊牧文明研究所)「「オサン・ズイリイン・タブ」という地名について」
- ◆L. Purevlham プレブルハム(モンゴル国オヴォルハンガイ県教育文化局)「エルデネゾー寺院——貴重な遺産」

分科会B : 「オンドゥル・ゲゲーンの遺産とその研究」

- ◆S. D. Syrtypova スィルティポヴァ(ロシア科学アカデミー生態学・進化学研究所)「仏教芸術の発展においてザナバザルが果たした貢献」
- ◆S. Badral バドラル(モンゴル国立文化芸術大学)「オンドゥル・ゲゲーン・ザナバザルの金・銀・銅仏像の形象比較」
- ◆Z. Oyunbileg オヨーンビレグ(モンゴル国立科学技術大学)「トゥブフン寺院の守護尊」
- ◆S. Nandintsetseg ナンディンツェツェグ(モンゴル国立大学)「オンドゥル・ゲゲーン・ザナバザルと

モンゴルの緑ターラー仏の形象」

- ◆N. Khatanbaatar ハタンバートル(モンゴル科学アカデミー歴史・考古研究所)「オンドウル・ゲゲーンに関わる若干の移動寺院についての歴史資料の検証」
- ◆D. Khorolbat ホロルバト(モンゴル国・「ナモ・ブダ」協会)「オンドウル・ゲゲーン・ザナバザル作『ノルブー・バドマ・マーニ』の詞とメロディについての研究」
- ◆S. B. Bardaleeva バルダレエヴァ(ロシア連邦ブリヤド国立博物館)「ブリヤド国立博物館の芸術品コレクションより」
- ◆Ts. Gunchin-Ish グンチン=イシ(モンゴル国・ボグド・ハーン宮殿博物館)「ボグド・ハーン宮殿博物館におけるオンドウル・ゲゲーンのコレクションと遺産」
- ◆A. I. Shinkovoi シンコヴォイ(ロシア連邦イルクーツク郷土研究博物館)「イルクーツク郷土研究博物館収集中のモンゴル・コレクションと中央アジア研究者・ロシアの研究者」
- ◆Aryuna Balijurova アリュナ・バリジュロヴァ(ロシア連邦ブリヤド国立博物館)「ブリヤド国立博物館収集中の仏教タンカ図「ホアジン・ゾラグ」
「オンドウル・ゲゲーンがつくった文字の研究」
- ◆R. Byambaa ビヤムバー(ポーランド・ワルシャワ大学)「ソヨンボ文字で法の三言語を記した文献」
- ◆T. Matsukawa 松川節(大谷大学)「モンゴル人の文字史においてザナバザルのソヨンボ・横書き方形文字が占める位置」
- ◆D. Luvsanjamts ロブサンジャムツ(ガンダン寺)「オンドウル・ゲゲーンがつくった方形文字の研究によせて」
- ◆B. Nyammyagmar ニヤムミヤグマル(モンゴル科学アカデミー言語文学研究所)「ソヨンボ文字の解説書について」
- ◆J. Yeruult ヨロールト(モンゴル科学アカデミー言語文学研究所)「ソヨンボ記号の意味についてのモンゴル僧侶たちの解釈」
- ◆T. Suzuki 鈴木俊哉(広島大学)「ザナバザルがつくったソヨンボ・横書き方形文字の現代的「ユニコード」への適合」
- ◆T. Jamiyansuren ジャミヤンスレン(モンゴル国)「ソヨンボ文字の最近の使用状況」
- ◆Ts. Munkh-Erdene モンフエルデネ(モンゴル国ズーンフレ)「ソヨンボ・横書き方形文字の使用方法について」

日本からは栗林均(東北大学)、鈴木俊哉、松川節が参加し、栗林は分科会B後半セッション「オンドウル・ゲゲーンがつくった文字の研究」の司会を担当した。このセッションは、最近、アメリカ主導で進められているソヨンボ文字と横書き方形文字のユニコード規格化の動きをうけて、両文字が成立した歴史的経緯、両文字で書かれた資料、ユニコード規格化案の問題点などを討論したものであった。

なお、本会議の報告論文は、論文集*Өндөр гэгээн Занабазар: Амьдрал, өв*. Улаанбаатар 2015. (456pp.)として2015年9月に刊行されていることを附言する。

4. 国際学術会議「モンゴル語原典資料研究」

International Scientific Conference on “Mongolian Textual Research Studies”

岡田 和行(東京外国語大学)

OKADA Kazuyuki(Tokyo University of Foreign Studies)

2015年8月21日(金)、国際学術会議「モンゴル語原典資料研究(モンゴル語ではМонгол сурвалж бичгийн судлал)」がウランバートル市で開催された。会議はモンゴル国立大学モンゴル研究所と同大学総合科学部人文系モンゴル語学・言語学研究室が共催し、モンゴル国教育文化科学省、モンゴル研究国家評議会、モンゴル研究支援基金、「モイス・プレス(MUIS PRESS)」(モンゴル国立大学出版会)の4機関が協賛した。午前9時30分から、モンゴル日本センター1階大会議室で開かれた開会式では、モンゴル国立大学のJ.バトイレードゥイ(J.Bat-Ireedui)モンゴル研究所長、R.バトエルデネ(R. Bat-Erdene)学長、モンゴル研究国家評議会のD.ザヤーバータル(D.Zayabaatar)事務総長のあいさつに続き、モンゴル国立大学のSh.チョイマー(Sh.Choimaa)教授の「原典研究における比較研究の重要性」という基調講演が行われた。その後、センターの正面玄関前で50名あまりの参加者の記念集合写真の撮影が行われ、引き続き午前10時から同所で会議が始まった。(以下、敬称略)

午前の前半のセッションは、モンゴル国立大学のD.ブルネー(D.Burnee)の司会で、計8名の発表があった。モンゴル国立大学のM.バイルサイハン(M.Bayarsaikhan)の「サガン・セチェン・ホンタイジの『エルデニーン・トプチ(蒙古源流)』の卷子本」は、モンゴル国立図書館所蔵の同書の卷子本(幅21.8cm、全長71.1m)の由来と特徴について論じた。教育研究所(NGO)のL.マナルジャブ(L.Manaljav)の「モンゴル秘史の言語の特徴—熟語の使用」は、秘史原文に現れるいくつかの熟語や慣用語を取り上げ、現代言語学の観点からの研究の必要性を説いた。科学アカデミー言語文学研究所のR.オトゴンバータル(R.Otgonbaatar)の「モンゴル古来の木版本『ナイマン・ゲゲーン』について」は、カラホト出土文書中のモンゴル語の木版本の断片(No.059/F20:W64)が、13-14世紀の翻訳と推定される木版本『ナイマン・ゲゲーン』の一部であることを明らかにした。東京外国語大学のE.プレブジャブ(E. Purevjav)の「オンホディーン・ジャミヤン公の著わしたモンゴル語文法書」は、ジャミヤン公(1864-1930)が1910-1920年代に著わしたモンゴル語のいくつかの教科書や文法書を紹介し、その教育的・学術的な功績を讃えた。科学アカデミー言語文学研究所のO.サンボードルジ(O.Sambuudorj)の「モンゴル語の語源研究における音声の変化と対応の役割」は、いくつかの語例を提示しながら、モンゴル語の語源研究や古いモンゴル語の復元にとって音声変化と音声対応の研究が有意義であると説いた。教育研究所のD.バトトグトフ(D.Battogtokh)の「Ch.ダンダーの『エルデネト・トリ』はモンゴル民族の教育遺産の主要な原典資料である」は、ダンダーことチミディーン・テムジグドルジ(1863-1932)の同書の内容を紹介しながら、その教育的な意義と特徴を明らかにした。科学アカデミー言語文学研究所のD.ナランツェツェグ(D.Narantsetseg)の『ツァガーン・ソブド・エリヘ』の作者について」は、チンギス・ハーンの子孫に当たるウジェムチン右旗の第12世ホショイ・セチェン親王ソドノムラブダンの生涯を編年体で記述した同書が1936年にチベット語で著わされ、その作者がウジェムチンのホールト寺院の学僧オソル・ラブジャンバであることを紹介した。モンゴル国

立図書館のCh.ガンスフ(Ch.Gansukh)の「モンゴル国立図書館所蔵の原典資料の表題の誤りについて」は、同図書館所蔵の21,100点に及ぶ原典資料の内、1,200点の表題や人名に何らかの誤記、齟齬、脱落などが散見され、それが検索を困難にしていると指摘した。

午後の後半のセッションは、モンゴル国立大学のM.バヤルサイハンの司会で、計7名の発表があった。東京外国語大学の二木博史(FUTAKI Hiroshi)の「古地図と境界報告書を史料として利用する——トゥシェート・ハン部ドンド旗を事例として——」は、ドンド旗の歴史を研究する史料として古地図や境界報告書を利用した事例から、それらをモンゴル史研究の史料として今後利用できる可能性について論じた。東京外国語大学の岡田和行(OKADA Kazuyuki)の「D.ナツァグドルジの短編小説『白い月と黒い涙』のテキスト研究」は、1955年版、1961年版、1996年版、2006年版の刊本では削除されている小説の結末部分を手稿にしたがって復元し、文学研究におけるテキスト改竄の弊害を指摘した。国際教養大学のガンバガナ(Ganbagana)の「モンゴルにおける漢人商人について」は、1930年代のシリング盟の状況を事例として、漢人商人の活動が当時のモンゴル社会に与えた影響を考察した。東京外国語大学大学院のオユングワ(Oyunguwa)の『『奉天蒙文報』とモンゴル知識人の思想』は、ヘーシゲーやボヤンマンダフなど当時の内モンゴル知識人の『奉天蒙文報』(1918年8月創刊)に掲載された論説や記事を紹介しながら、彼らの民族主義思想や啓蒙思想を跡づけた。東京外国語大学の上村明(KAMIMURA Akira)の「アルタイ・オリヤンハイ7旗の右翼長バルダンドルジが1912年に提出したボグド・ハーン制モンゴル国への編入請願書について」は、この請願書が当時の西モンゴルの多くの指導者の意向や社会的・政治的動向を反映した重要な原典資料だと指摘した。モンゴル・チベット仏教研究所のJ.アムガラン(J.Amgalan)の『『アツガド簡史』における『シルデイ章京の歌』の手稿について』は、ウラン・ウデ市の東洋手抄本・木版本センター所蔵の「ホリ・ブリヤートについてアツガドで書かれた簡史」という原典資料にあるバルガ・ブリヤートの民謡「シルデイ章京の歌」の歌詞の言語について、その形態論的特徴を提示した。京都大学大学院の植田尚樹(UETA Naoki)の「ハルハ・モンゴル語における語中長母音の音の長さ」は、いくつかの語例に基づき、語中に現れる長母音の音の長さについて分析した。

午後の前半のセッションは、東京外国語大学の二木博史の司会で、計8名の発表があった。モンゴル国立大学のD.ブルネーの「イシバルダンの『エルデニーン・エリヘ』という原典資料について」は、イシバルダンが1835年に書いた同書の書誌学的情報を詳述した。大阪大学の塩谷茂樹(SHIOTANI Shigeki)の「モンゴル系諸語における名詞形成接尾辞*-gur²について」は、「当該の動作を行う興味や慣行がある」という意味を表す名詞(形容詞も含む)形成接尾辞の*-gur²について、いくつかの語例を挙げながら、その起源、変化、発展、特徴を述べ、モンゴル系諸語におけるその分布状況を紹介した。モンゴル国立大学のL.チョローンバートル(L.Chuluunbaatar)の『『誠実で温和なハーンの創作した詩』という小冊子について』は、モンゴル文字、チベット文字、ランチャ文字の3種の文字を対照させて書いたわずか3頁からなるこの小冊子が、モンゴル語研究の貴重な原典資料にもなりうることを指摘した。ズーン・フレー大学のG.ミヤグマルスレン(G.Myagmarsuren)の「ラムリム(菩提道次第)教説のモンゴルにおける伝統」は、ツォンカパ(1357-1419)の主著『菩提道次第論』に起源を持つラムリム(Lam rim)教説のモンゴルにおける弘通について論じた。エトヴェシュ・ロラード大学(ハンガリー)のKrisztina Telekiの「ウルガ(庫倫)の寺院のチベット語とモンゴル語の目録」は、

1840年から20世紀初頭までに記録された70種の目録の内、30の寺院の仏像、タンカ(仏画の掛け軸)、仏典を記録した20種の目録を紹介した。モンゴル国立大学のT.オトゴントール(T.Otgontuul)の「モンゴル国立図書館所蔵の満洲語の著作について」は、同図書館所蔵の康熙帝の満洲語の教訓書『聖諭広訓』の概要を紹介した。サンクトペテルブルク大学のE.ムンフツェツェグ(E.Munkhtsetseg)の「満洲語=モンゴル語辞典——18-20世紀の編纂史」は、『御製清文鑑』(1708)、『御製滿蒙清文鑑』(1717)、『御製増訂清文鑑』(1771)など、清代18世紀の満洲語辞典、満洲語=モンゴル語辞典の編纂事業を中心に紹介した。大阪大学のYa.バダムハンド(Ya.Badamkhand)の「モンゴル語と日本語の擬態語の翻訳に現れるいくつかの問題について」は、両言語の擬態語の翻訳においては「訳さない」「説明的に訳す」「該当する擬態語に訳す」の3段階があると指摘した。

午後の後半のセッションは、モンゴル研究国家評議会のD.ザヤーバートルの司会で、計3名の発表があった。モンゴル国立大学のTs.バートルガ(Ts.Battulga)の「銀製の容器の底の文字を精査する」は、2009年にトゥブ県ザーマル郡で出土した銀製の容器の底のルーン文字について、大阪大学の澤孝らの研究を詳しく紹介した。この発表の後、報告者は用事で席を外していて聞けなかったが、モンゴル国立大学のB.アズザヤー(B.Azzaya)の「モンゴルのルーン文字資料における十二支」、ベルリン自由大学(ドイツ)のElisabetta Ragagninの「北東現代アラム語に残存しているモンゴル語」という2つの発表があった。

すべての研究発表が終了した後、総括討論会が行われた。まず4名の司会者が各セッションでの発表を総括し、次に質疑応答が行われた。討論会では様々な質問や意見が提起され、活発な議論が展開された。最後にモンゴル国立大学のJ.バトイレードゥイが閉会の辞を述べて会議は終了した。その後、ウランバートル市内の「ゲート・レストラン」に席を移し、賑やかな懇親会が催された。

翌8月22日(土)にはエクスカージョンが組まれ、会議参加者は朝、「ザローチョード・ホテル」前に待機していたモンゴル国立大学の観光バスに乗り、トゥブ県ボルノール郡に新たに建立された「アグラグ寺院(Aglag buteeliin sum)」を訪れ、険しい山腹に造営された広大な境内を散策した。そして夕刻ウランバートル市内に戻り、会議の全日程が終了した。

5. 国際学会「中国第4回モンゴル学国際学術研討会」

The Chinese Fourth International Symposium on Mongolian Studies

松川 節(大谷大学)

MATSUKAWA Takashi (Otani University)

2015年8月21日～22日、中華人民共和国フフホト市の新城賓館において、中国第4回モンゴル学国際学術研討会が、内蒙古社会科学院と中国蒙古学学会の共催により、「草原のシルクロードと世界文明」をテーマに開催された。

8月21日09:00より開会式が挙行され、白向群(内モンゴル自治区副主席)の司会により、オラーン(内モンゴル自治区党委員会常務委員・宣伝部部長)、王偉光(中国社会科学院党組織部書記・院長)、Kishore SINGH(国連教育権問題特別報告者)、T. ドルジ(モンゴル科学アカデミー副総裁)、高樹茂(駐モンゴル国・中華人民共和国前大使)がそれぞれ祝辞を述べた。

写真撮影の後、午前中4本、午後8本の学術報告がなされた。

- ◆呉団英(内モンゴル自治区人民代表大会常務委員会副主任・中国蒙古学学会会長)「モンゴル学の学問体系化を推進するための構想について」(基調講演)
- ◆郝時遠(中国社会科学院学部秘書長・院長助理)「歴史における「一帯一路」建設の文化力量について」
- ◆D. Tumurtogoo トウムルトゴー(国際モンゴル学会事務局長・モンゴル科学アカデミー会員)「元朝の文字政策」
- ◆Victor LARIN ラリン(ロシア科学アカデミー極東支所歴史研究所所長)
- ◆郝維民(内モンゴル大学教授)
- ◆Čoyji チョイジ(内モンゴル社会科学院研究員)「ダルマダーラ著『白蓮宝珠』について」
- ◆E. Sundueva スンドウエヴァ(ロシア科学アカデミー・シベリア支所研究員)“Manifestation of Phenomena of Look by Means of Stem Consonant / in Mongolic Languages”
- ◆バイガルサイハン(モンゴル国ウランバートル大学学長)「20世紀文学中のモンゴル手紙文学の伝統について」
- ◆松川節(日本国大谷大学副学長・教授)「大元ウルス大ハーン聖旨の冒頭句 *yeke suu*」
- ◆金成修(韓国ソウル科学技術大学教授)「古代黄河流域と北方草原文化区域の間の文化交流の一面——トグ(纛)の歴史性」
- ◆M. サンタロー(フランス・世界音楽・アルタイソール研究所教授)
- ◆チンゲルト(内モンゴル師範大学モンゴル学学院院長・教授)「モンゴル語のホルショー・ウグについて」

8月22日、09:00より12:00まで、四つの分科会(1. 歴史 2. 言語 3. 文学 4. 草原文化)がそれぞれ開催された。以下、筆者が参加した歴史部会のみ報告者と論題を報告順に列挙する。

- ◆Čebegjab チェベグジャブ(新疆社会科学院)「シルクロード古道における柔然研究」

- ◆B. Nanzatov ナンザトフ(ロシア科学アカデミー・シベリア支所)「バルグジン・トクムの遺産——バルガ・ブリヤドの民族史」
- ◆甄自明・王春霞(オルドス学研究会)「オルドス青銅器と草原のシルクロード」
- ◆武国驥(内蒙古師範大学)「蒙古族族源研究」
- ◆Ts. Sarantsatsral サランツァツァラル(モンゴル国立大学)「『モンゴル秘史』の外国語訳研究」
- ◆Qurča ホルチャ(内蒙古師範大学)「ドロンノール掌印ジャサグ・ダーラマとその印務処の管理」
- ◆B. Sinennigen 白初一(赤峰学院)「清朝太宗ホンタイジはマハカラ仏、玉璽、エジェイ・ホンゴルを利用してモンゴルを思想的に支配した」
- ◆劉蒙林(内蒙古社会科学院)「清代綏遠城軍府制度初探」
- ◆全榮(内蒙古社会科学院)「藏・満・蒙三文合璧『十八合宜教訓』とその書写年代について」
- ◆Gangbatu ガンバト(赤峰学院)「元代河西回廊の牧畜業について」
- ◆李俊義・袁剛(赤峰学院)「『原任綏遠城將軍宗室弘响碑文』と関連問題考釈」
- ◆劉春子(内蒙古社会科学院)「元代の景教復興と草原シルクロードの共鳴——オングート人を中心に」

以上で学術報告は終了し、午後は学術考察として観光バスに分乗し、フフホト市南郊の昭君博物院を見学し、さらにその近辺の「蒙古風情園」にて民族歌舞コンサートを鑑賞しながら晚餐を摂った。

参加した研究者の数は200人近くに及び、合計91の報告がなされたとのことである。残念なことに、日本からの参加者は筆者一人のみであった。

6. 第8回ウランバートル国際シンポジウム「日モ関係の歴史、現状と展望——21世紀東アジア新秩序の構築にむけて」

The 8th International Symposium in Ulaanbaatar “The Japan-Mongolia Relationship: Its History, Present, and Prospects in the 21st Century Reorganization of the New Order in East Asia”

ボルジギン・フスレ(昭和女子大学)

Borjigin HUSEL (Showa Women's University)

2015年8月29、30日の2日間、第8回ウランバートル国際シンポジウム「日モ関係の歴史、現状と展望——21世紀東アジア新秩序の構築にむけて」がウランバートルで開催された。主催は昭和女子大学とモンゴル国立大学モンゴル研究所、後援はモンゴル人文大学、モンゴルの歴史と文化研究会、モンゴル・日本人材開発センターであり、日本学術振興会、公益財団法人渥美国際交流財団、守屋留学生交流協会の助成を得ておこなわれた。

本シンポジウムは、第2次世界大戦終結後の日モ関係を中心に、東アジア地域の地政学的特質などに焦点をあて、新たに発見された歴史記録や学界の最新の研究成果を踏まえて、歴史的恩怨を乗り越えた日本とモンゴルの友好関係の経験から得られる知見を発見しそれを検討することを目的とした。

29日午前、モンゴル・日本人材開発センター多目的室で開会式がおこなわれ、坂東眞理子昭和女子大学理事長・学長、モンゴル国会議員S.オヨーン氏、清水武則在モンゴル日本大使が挨拶と祝辞を述べた。その後、1日半にわたり、「第2次世界大戦の終結と日本人のモンゴル抑留」、「冷戦下の日本・モンゴルの国際社会への復帰——日モの国連加盟、および国交締結をめぐる国際関係」、「21世紀東アジア新秩序の構築にむけて——日モ関係の視点から」を基本コンセプトとして20件の研究報告がおこなわれた。

二木博史東京外国語大学教授の報告「日本人のモンゴル抑留の再検討」は、ソ連による日本人抑留は日本人のソ連に対する感情に決定的な影響をあたえたのに比較して、モンゴルによる抑留が日本人のモンゴル観にマイナスの感情をそれほど残さなかったのは、モンゴル自体がソ連の支配下にあるという理解が日本人のあいだで共有されていたためだと指摘した。また、日本人のモンゴル抑留の本質は戦勝国の権利の濫用による外国人の強制連行と強制労働であり、モンゴルの都市建設史のなかに詳しく記述すべきだと問題提起した。わたくしの報告「日本人抑留者の帰還をめぐる国際関係」は、1946年から1949年まで抑留者の日本帰還をめぐる交渉が日本・ソ連・アメリカを中心におこなわれたが、中華人民共和国成立後、東アジア地域の国際秩序があらたに再構成され、交渉は主に「ソ連・中国・モンゴル・北朝鮮」対「アメリカ・日本・台湾・韓国」という東アジアの冷戦秩序のなかで展開されたと考え、台湾が中国とモンゴルの日本人抑留者の送還、および日本から中国への華僑の引き揚げをめぐる交渉に対して干渉と阻止をつづけたことを解明した。モンゴル国立大学大学院博士課程のB.エルデニビルグ「日モ関係における捕虜問題」は、日モ両国にとっての「モンゴル抑留」の意味、モンゴル国民の日本人抑留の認識などを検討し、捕虜(抑留者)の遺骨収集問題などをめぐる交渉が日モ外交関係の回復において果たした役割の重要性を強調した。

村田雄二郎東京大学教授の「強兵なき富強?—近現代東アジアにおける4つの“戦後”」は、戦争が経済的社会的平等を加速することで戦後民主主義の質を規定したと指摘し、脱植民化の課題は冷戦の溶解とともに復活したのであり、それをもたらしたのは冷戦の終わりという新たな「戦後」だと述べ、新たな「戦前」に身を置くかの如く、日本人がこれまで経験してきた「戦前」と「戦後」の関係を改めて問う可能性を示した。O.バトサイハン・モンゴル科学アカデミー国際研究所教授「大島清が日本に持ち帰ったモンゴルの法律関係の資料について」は戦前の日モ関係の一端を考察した。同アカデミー歴史研究所首席研究員G.ミャグマルサムボー教授の「日モ関係における民間交流の役割」は、従来、研究者によって利用しえなかったモンゴル語、ロシア語などの資料を基礎に、1950年代のモンゴルと日本の関係を再検討し、国連加盟における両国の民間交流の役割を浮き彫りにした興味深い報告だった。

平川均国士館大学教授(名古屋大学名誉教授)の「世界とアジアの経済の構造転換と周辺経済」は、ユーラシアランドブリッジ構想につながるものがモンゴルの未来に大きく関わっており、外交上の知恵と、アジア通貨危機後に動き始めたこの地域における国際協力制度への積極的参加がモンゴルの将来を切り開くことになることを際立たせた。上村明東京外国語大学講師の報告「ポスト社会主義モンゴル国の牧畜部門における土地改革と開発プロジェクト」は、モンゴル国の牧畜部門に対し日本をはじめとする援助国が国際開発機関をとおしておこなってきた開発プログラムが、モンゴルの牧畜に与えた影響について考察し、その問題点をとيناおした。窪田新一大正大学教授の「モンゴル開拓の歴史とモンゴル人のアイデンティティ」は、近代以降のモンゴルにおける草原開拓の歴史をさぐり、内モンゴルにおける農業推進・工業建設の経験と教訓から、モンゴルにおける開発問題を再検討し、資源大国モンゴルにとって、優れた自己像を未来に残すため、どのようにアイデンティティを築いていくかはまさに重視すべき最重要課題の1つではないかと問いかけた。L.ダシブレブ・モンゴル人文大学准教授の「モンゴル・日本における経済協力」は、モンゴルの民主化以降の日モ経済関係を分析し、今後における鉱山開発を中心とした両国の経済協力を展望した。湊邦生高知大学准教授の「次代のリーダーはどの国か?モンゴルからみたアジアの将来予測」は、将来アジアにおける影響力が最も強くなる国が中国であることはモンゴルの国民に認識されていると示すと同時に、モンゴルに対する中国の影響についてのモンゴルの人々の受け止めかたは解明が進められるべき課題だと、注意を喚起した。Ts.トゥメン・モンゴル国バルガ遺産協会長の「モンゴル・日本における民間協力の一考察——吉田基金の活動を中心に」は、日本の民間組織である吉田基金がモンゴルのフルンボイル・ソムという地方でおこなった活動を紹介し、日モにおける民間交流のあるべき協力の姿、未来志向の視座を求めた。D.ダシドラム・モンゴル国立大学教授の「日本・中国・韓国における若者の動向」は、靖国神社に関する日本・中国・韓国3国の若者の認識とその動向に注目し、歴史認識問題の解決において、政治的関与からぬけだし、客観的、公正に歴史教育をおこなうことが重要だと強調した。このほか、東京外国語大学外国人研究者オヨンゴアの報告「日本人発行の最初のモンゴル語刊行物『奉天蒙文報』とモンゴル“知識人”」やモンゴル国立大学のR.ピゲルマーの報告「B.ヤボーホランによる俳句について」は、近現代モンゴル地域における文学と日本の関係について、検討した。

本事業の成果をまとめた論文集は2016年3月に出版される予定である。

7. I. J.シュミットの聖書翻訳200年記念国際シンポジウム「聖書のモンゴル語翻訳と精神史」
The International Symposium Commemorating the 200 Anniversary of the First Mongolian
Translation by Isaak Jacob Smidt
“Bible Translation and The Intellectual History in Mongolia”

荒井 幸 康(亜細亜大学)

ARAI Yukiyasu (Asia University)

2015年はイサーク・ヤコブ・シュミット(1779-1847)がペテルブルグでカルムイク・モンゴル語での聖書翻訳を出版した1815年から200年目にあたる。それを記念して「聖書のモンゴル語翻訳とその精神史」と題されたシンポジウムがモンゴル宗教文化研究会、聖書翻訳協会、アントン・モスタールト・モンゴル研究センター、モンゴル宗教学協会の共催で、科学研究費助成(基盤研究(C)(課題整理番号:26370088)『聖書翻訳史から見るモンゴルのキリスト教思想』)を得て、2015年9月4日、モンゴル国首都ウランバートル市のモンゴル日本センターにて開催された。

午前(第1セッション)に4つ、午後(第2セッション)に4つ、計8つの発表と、それに基づいた討論が行われた。

冒頭でモンゴル宗教学協会会長のS.ツェデンダンバ教授による開会のあいさつがあり、聖書協会のV.ドゥゲルマー氏による馬頭琴を弾きながらの即興詩による祝辞が詠まれた。

第1セッションでは、清泉女学院大学の芝山豊教授による基調講演「聖書のモンゴル語翻訳と精神史」、長崎大学の滝澤克彦准教授による「聖書諸版の比較研究について」、聖書協会のG.バヤルジャルガル氏による「キリスト教に関する小冊子(товхимол)(19世紀)と旧約聖書(1840年)の翻訳語比較」、荒井幸康による「ロシアにおけるモンゴル系諸族の聖書翻訳」の4つの発表がなされた。

芝山教授の基調講演「聖書のモンゴル語翻訳と精神史」では、モンゴル系の諸民族におけるキリスト教受容の歴史は1000年の歴史があり、受容と拒絶が入れ替わり現れる歴史であったこと、また、社会主義の時代にあっても、ダンテやゲーテなどの翻訳を通して、キリスト教的な神概念に関する受容は続けられていたことなどが述べられた。

滝澤准教授の「聖書諸版の比較研究について」では、100あまりにおよぶモンゴル語訳聖書(復刻版、分冊版を含む)の各版のデータベース化の概要が説明され、用語選択などにかかわる諸版の影響関係や比較の方法について論じられた。また、周辺資料を広く収集・分析することで、聖書翻訳に与えた社会的・時代的要因を研究する必要性が訴えられた。

続く聖書協会のG.バヤルジャルガル氏による「キリスト教に関する小冊子(товхимол)(19世紀)と旧約聖書(1840年)の翻訳語比較」では、19世紀の初めノムトとバドマという二人のブリヤート人をアシスタントとして従えてI. J.シュミットが行ったキリスト教に関する小冊子のモンゴル語(ブリヤート語)への翻訳を、1840年に長年ブリヤートにおいて布教活動に従事した英国出身のスワン、スタリブラスの両宣教師が翻訳し1840年に出版した旧約聖書に現れる翻訳語と比較し、シュミット訳の影響などを検討したものである。

荒井幸康による「ロシアにおけるモンゴル系諸族の聖書翻訳」では、実は1815年の聖書のシュミ

ット訳以前の1724年にもロシア正教会によるモンゴル系の言語への翻訳の記録が残っているが、実物は残っていないこと、ロシアにおける国民国家への意識の芽生えとともにそれまでロンドンの聖書翻訳協会との協力の下で行っていた作業をやめ、独自の聖書訳を追求するとともに、国民国家への統合の手段として、モンゴル文字の使用をやめ、キリル文字を使ったモンゴル系諸語への翻訳が現れていったことが指摘された。

午後の第2セッションでは、V.ドゥゲルマー氏の「モンゴル語の聖書翻訳とその修正作業、1996-2013」、中国・内モンゴル大学のアルタンボラク教授の「オルドスにおける宣教と聖書翻訳」、都馬バイカル教授の「スウェーデン宣教団の出版活動及び聖書翻訳」、モンゴル国立教育大学のアルタンザヤ教授による「帝政ロシアの諸研究者によるモンゴル宗教研究状況と彼らの翻訳に関する諸問題」がそれぞれ発表された。

午後最初の発表である「モンゴル語の聖書翻訳とその修正作業、1996-2013」では、ギリシャ語、ラテン語からの聖書翻訳を完遂させようとするため努力の結果、どのような形で聖書の翻訳が変化していったかが、もともとのギリシャ語やラテン語やその後のモンゴル語での翻訳を比較させて、現在の翻訳がどうしてこのような形になったかが提示された。

中国・内モンゴル大学のアルタンボラク教授は残念ながら欠席となったが、送られた「オルドスにおける宣教と聖書翻訳」の発表原稿を都馬バイカル教授が代読した。19世紀に清朝においてキリスト教の布教が行われたが、モンゴル地域もその対象となったこと、キリスト教徒になったのは、半農耕民が多く、牧民はほとんど受容しなかったこと、また、数は少なかったが、オルドスやチャハルといった地域で受容され、特にオルドスでは多くの翻訳がなされ、仏教やシャマニズムと合わせ、三つの宗教が入り混じる地域であったことは非常に興味深いという報告であった。

都馬バイカル教授の「スウェーデン宣教団の出版活動及び聖書翻訳」では、中国やモンゴル、スウェーデンの資料を用いて、内モンゴルのみならず、現在のモンゴル国にあたる地域でも活躍したスウェーデンの宣教師たちの活動についての報告が行われた。

最後に、モンゴル国立教育大学のアルタンザヤ教授による「帝政ロシアの諸研究者によるモンゴル宗教研究状況と彼らの翻訳に関する諸問題」では、これまでの発表とは逆にコワレフスキー、大主教ニル、A. M.ボズネエフといったモンゴルの宗教研究を行った学者たち(特に後者の2人はキリスト教の宣教師の立場から研究を行った)の軌跡とその活動の中で行った翻訳に関する評価を紹介していた。

これらの発表の後の討論でも、それぞれの発表に対する活発な質疑応答がなされた。

会議の参加者は50名余りであったが、カトリック、プロテスタント、ロシア正教の諸宗派に渡り、さらにモンゴルシャマン連合(Монголын Бөөгийн Нэгдсэн Холбоо)など多岐にわたる人々が集うものとなった。

モンゴル側主催者の中心を担った聖書協会としてはこの成功をもとにこの200年間の成果と積み残された問題を解決すべく、さらなるシンポジウムを企画している。モンゴル宗教学協会もこのシンポジウムをスタートにさらなる研究集会を考えていくとのことであり、今後の研究の展開が期待される。

8. 国際会議「人々、文化、世界の境界において」第三部会「ロシアとモンゴル：過去と現在——
キャフタにおけるモンゴル自治に関する三カ国協定締結100周年」

On the Border of Peoples, Cultures, and Worlds

Russia and Mongolia: Past and Present. The 100th Anniversary of the Signing in the Town of Kyakhta
Tripartite Agreement on the Autonomy of Mongolia

橘 誠(下関市立大学)

TACHIBANA Makoto (Shimonoseki City University)

1915年6月7日、モンゴル・ロシア国境の町キャフタでモンゴル、ロシア、中国によりキャフタ協定が締結された。本協定は、独立宣言後のモンゴルの政治的地位について一つの形を提示した。それは、外モンゴルの自治と中国の宗主権というものであった。

2015年はこのキャフタ協定締結からちょうど100年が経つため、記念史学が盛んなモンゴル国においても当然にして国際会議が開催されるであろうと予想していた。4年前の2011年にはモンゴル独立宣言100周年の会議が、3年前の2012年には露蒙協定締結100周年の記念会議が開催されていたからだ。しかしながら、この予想は見事に裏切られた。

2015年にキャフタ協定締結100周年に関連する国際会議はモンゴル国においては開催されず、今回私が参加したのは、“Russia and Mongolia: Past and Present. The 100th Anniversary of the Signing in the Town of Kyakhta Tripartite Agreement on the Autonomy of Mongolia”という、キャフタ郷土史博物館設立125周年記念の国際会議On the Border of Peoples, Cultures, and Worldsの一部会に過ぎなかった。しかも、この国際会議自体が「シベリアにおける観光週間Tourism week in Siberia」というイベントの一環として開催されたものであった。会議はロシア連邦文化省、ブリヤート共和国政府、キャフタ郷土史博物館、ロシア科学アカデミー・シベリア支部モンゴル学・チベット学・仏教学研究、モンゴル科学アカデミー国際研究所、ブリヤート国立大学などの共催で、9月9日、9月10日の2日間にわたってキャフタにおいて開催された。

空港も鉄道の駅もないキャフタでの会議ということで、私は会議に参加するバトサイハン教授(モンゴル科学アカデミー国際研究所)、中見立夫教授(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)、サンジミヤタフ教授(モンゴル国立大学)、ダシドンドク・ラマの5人で陸路キャフタを目指すことにした。9月8日の朝7時にウランバートルを出発、途中ダルハンで昼食をとり、モンゴル側の国境の町アルタンボラクには昼過ぎに到着した。ここから国境を越えるのに4時間近くかかり、夕方ようやくキャフタに到着した。キャフタでは、キャフタ郷土史博物館の館長ペトシケイエフ氏が出迎えてくれ、夕食を共にした。

翌9月9日は正午から全体会議で、ブリヤート共和国文化大臣ツィビコフ氏、ロシア地理学協会ブリヤート共和国支部議長トロホノフ氏、キャフタ管区長ボヤントエフ氏の三人が挨拶し、キャフタの歴史的重要性を確認した。続いて、バトサイハン教授、中見立夫教授、バザロフ教授(ロシア科学アカデミー・シベリア支部モンゴル学・チベット学・仏教学研究)、ペトシケイエフ氏らが報告を行った。

9日の午後は、キャフタにおける「シベリアにおける観光週間」のイベントが町を挙げて開催され、ロシア国内の様々な民族の食事が提供され、民族衣装を纏った人々による歌や踊りが披露された。

10日は第一部会“The Museum in the Context of Contemporary Realities: Problems, Experience, Prospect”、第二部会“Kyakhta in the History of Research of Eastern Siberia and Central Asia”、第三部会“Russia and Mongolia: Past and Present. The 100th Anniversary of the Signing in the Town of Kyakhta Tripartite Agreement on the Autonomy of Mongolia”、第四部会“The Development of Border Areas: History and Modernity”の4つの部会に分かれて報告が行われた。各部会の会場がそれぞれ離れていたため、他の部会に出入りすることは難しかった。

私が報告した第三部会では、当初9名の報告が予定されていたが、クラス教授(ロシア科学アカデミー・シベリア支部モンゴル学・チベット学・仏教学研究)、バヤルフー教授(モンゴル国外務省)、オラムバヤル教授(モンゴル人文大学)、ノレフ氏(ロシア科学アカデミー・シベリア支部モンゴル学・チベット学・仏教学研究)の4名は欠席されたので、報告を行ったのはサンジミヤタフ教授、バトナエフ氏(ロシア科学アカデミー・シベリア支部モンゴル学・チベット学・仏教学研究)、ダシドンドク氏、フセル氏(昭和女子大学)と橘の5名のみであった。報告者の欠席が多かったため、第三部会は午前中で終了したが、その他の部会にはロシア国内ではモスクワやサンクトペテルブルク、チタ、イルクーツクなどから、海外からは中国や韓国、ポーランドなどからの参加者がいたという。最後にキャフタ郷土史博物館において全体の総括報告が行われ、会議は閉会した。

翌11日は、前日ウランウデに向かった中見氏に代わりフセル氏が合流、国境での混在を回避するために早朝6時に出発し、往路と同じ道程で夕方ウランバートルに戻った。

参考までに第三部会の報告タイトルを以下に挙げておく。

1. Курас Леонид Владимирович, Монгольский мир в начале XX века. (К 100-летию подписания Кяхтинского тройственного Соглашения)
2. Базарын Санжмятав, Международные аспекты трехсторонних русско-монголо-китайских переговоров в Кяхте в 1914-1915 гг.
3. Тачибана Макото, Вопросы и проблемы Кяхтинской конференции: пути их решения
4. Дашдоржийн Баярхуу, Координаты геополитических интересов Кяхтинского соглашения
5. Д.Уламбаяр, 1915 оны Хиагтын гурван улсын гэрээ, түүний Франц уг эхийн тухайд
6. Батунаев Эдуард Владимирович, Роль Кяхтинского тройственного соглашения 1915 г. в становлении монгольской государственности
7. Ш. Дашдондог, Исторические сведения в тибетской биографии, и о том как Жалханз Хутагт Дамдинбазар пожаловал в Кяхту
8. Боржигин Хүсэл, Контрмеры японского правительства в Кяхте
9. Нолев Евгений Владимирович, Новые теоретические направления в изучении русско-ордынских отношений в отечественной историографии начала XXI века

9. フビライ・ハーン生誕800周年記念国際学術会議

「フビライ・セチェン・ハーンとモンゴルのユアン【元】ウルス」

International Academic Conference in Honour of the 800th Birth Anniversary of Khubilai Khaan
“Khubilai Setsen Khaan and the Mongol Yuan Empire”

松 川 節 (大谷大学)

MATSUKAWA Takashi (Otani University)

2015年9月21・22日、モンゴル国ウランバートル市のモンゴル国立大学とモンゴル科学アカデミー本部において、フビライ・ハーン生誕800周年を記念した国際学術会議「フビライ・セチェン・ハーンとモンゴルのユアン・ウルス」が、モンゴル国政府、教育文化科学省の主催、モンゴル科学アカデミー歴史・考古研究所、国際モンゴル学連盟、エルデム協会、モンゴル国立大学、モンゴル国立歌舞団、文化遺産センター、国立フィルハーモニー、世界モンゴル族連盟、モンゴル・コスチューム・センター、モンゴル国営放送、ウランバートル市長官房、オボルハンガイ県知事官房、君主ハーン基金、「フビライ・ハーン」基金の共催により開催された。

9月21日、09:30より開会式がモンゴル国立大学一号館円形会議場で開催され、S. Chuluun チョローン・モンゴル科学アカデミー歴史・考古研究所長が開会を宣言し、開会挨拶をS. Bayartsogt バヤルツォクト・本会議組織委員会会長・モンゴル国政府官房長官、B. Enkhtuvshin エンフトゥブシン・モンゴル科学アカデミー総裁、K. Bicheldei ビチェルディ・ロシア連邦トゥワ共和国教育科学大臣の3名が行った。

続いて09:50～12:20まで基調講演6本が以下のように行われた。

- ◆Sh. Bira ビラ (国際モンゴル学連盟) 「モンゴルの天についての認識とフビライ・ハーン」
- ◆B.V. Bazarov バザロフ (ロシア科学アカデミー・シベリア支所モンゴル学・仏教学・チベット学研究所) 「モンゴル帝国期とポスト帝国期の政策——歴史経験と意義」
- ◆J. Boldbaatar ボルドバートル (モンゴル科学アカデミー歴史・考古研究所) 「フビライ・ハーンの行政手腕」
- ◆Park Wonkil パク・ウォンキル (韓国チンギスハーン学研究センター) 「フビライ・ハーンと耽羅」
- ◆S. Narangerel ナランゲレル (モンゴル科学アカデミー哲学研究所) 「フビライ・ハーン——父祖の政治理念の継承」
- ◆A. G. Yurchenko ユルチェンコ (ロシア連邦) 「ヨーロッパの世界地図におけるフビライ・ハーン(1375年のカタロニア図を利用して)」

昼食後、会場をモンゴル科学アカデミー本部ビルに移し、二部に分かれて研究報告が行われた。

分科会A：フビライ・ハーンの治世とユアン・ウルスの対外関係

第一部はチョローンとユルチェンコを座長として5人が報告した。

- ◆Kh. Shagdar シャグダル (防衛大学防衛学研究所) 「フビライ・ハーンの即位」

- ◆A. Sh. Kadyrbaev カディルバエフ(ロシア科学アカデミー東洋文献学研究所)「フビライ・ハーンはモンゴルの大ハーンか、中国の皇帝か？」
- ◆S. Tsolmon ツオルモン(モンゴル科学アカデミー歴史・考古研究所)「トルイ系にハーン位が移行するに際してパトゥが果たした役割」
- ◆Ts. Ishdorj イシドルジ(国際モンゴル学連盟)「フビライ・ハーンと「パクス・モンゴリカ」
- ◆B. Sumiyabaatar スミヤーバータル(モンゴル)「フビライ大ハーン時代のモンゴル・朝鮮関係の諸問題」
第二部はボルドバータルとパク・ウォンキルが座長を務め、3人が報告した。
- ◆Ts. Tserendorj ツェレンドルジ(モンゴル科学アカデミー歴史・考古研究所)「北ユアン【元】・高麗関係の諸問題」
- ◆T. Munkhtsetseg ムンフツェツェグ(モンゴル国立大学)「フビライ・ハーンの大日本政策について」
- ◆Oh Youngju オ・ヨンジュ(韓国済州漢学大学)「フビライ・ハーンと耽羅のモンゴル——パクス・モンゴリカの視座から——」

分科会B：ユアン帝国の遺産

第一部はCh. Amartuvshin アマルトゥブシンとHan Sung-uk ハン・スンウクが座長を務め、4人が報告した。

- ◆A. Ochir オチル(モンゴル国・国際遊牧文明研究所)「モンゴル帝国時代の中央アジア進出拠点都市の調査」
- ◆U. Erdenebat エルデネバト(モンゴル国立大学)、K. Franken フランケン(ドイツ科学アカデミー考古研究所)、T. Batbayar バトバヤル(モンゴル科学アカデミー歴史・考古研究所)「カラコルムの興元閣」
- ◆Ts. Turbat トウルバト(モンゴル科学アカデミー歴史・考古研究所)「タワン・トルゴイのモンゴル貴族墓の調査」
- ◆Kang Changhwa カン・チャンファ(韓国済州考古学研究所)「モンゴル耽羅(済州)の歴史—済州島のボブワ寺院址」
続いて第二部はトウルバトとカン・チャンファが座長を務め、4人が報告した。
- ◆J. Saruulbuyan サロールボヤン「「フビライ・ハーンの出獵図」について」
- ◆Sui Xiaode(台湾)「フビライ・ハーンと台湾の故宮博物院収蔵のモンゴル史関連遺物」
- ◆Han Sung-uk 韓盛旭(韓国国立海洋遺物展示館)「高麗後期の青磁と元代の磁器との関連」
- ◆Ya. Ganbaatar(モンゴル国外務省)「台湾におけるモンゴル研究と元代の歴史遺物」

18時より国立フィルハーモニーにて民族芸術コンサートがあった。

9月22日、終日、分科会が継続された。

分科会A：ユアン帝国の文字と宗教

第一部はD. Tumurtogoo トウムルトゴ(国際モンゴル連盟)とHwang Ingyu フワン・インギョ(韓国・東国大学校)が座長を務め、4人が報告した。

- ◆Ts. Shagdarsuren シャグダルスレン(ウランバートル国際大学)「モンゴル方形(パスパ)文字について」
- ◆T. Matsukawa 松川節(大谷大学)「近年新発見のパスパ文字モンゴル語資料概況」
- ◆L. Manarjav マナルジャブ(モンゴル)「パスパ文字研究の重要性」
- ◆R. オトゴンバートル(モンゴル科学アカデミー言語文学研究所)「フビライ・ハーン時代の文字と出版についての簡論」

続いて、座長がS. Tsolmon ツオルモン(モンゴル科学アカデミー歴史・考古研究所)とZhang Guowang 張國旺(中国社会科学院歴史研究所)に代わり、4人が報告した。

- ◆L. Terbish テルビシ、T. Chuluun-Erdene チョローン-エルデネ(人文大学)「フビライ・ツェツェン・ハーンの帝師パクパ・ラマ・ロドイイジャンツァンの偉業」
- ◆Sh. Soninbayar ソニンバイヤル(ガンダン寺学術文化研究所)「パクパ・ラマの一論争書について」
- ◆フワン・インギユ「高麗末期に元ウルスで瑜伽行派高僧が行った仏教行事」
- ◆J. Bayasah バヤサフ(モンゴル科学アカデミー国際関係研究所)「フビライ・ハーンが天に奉じた書について」

昼食休憩の後、第二部は座長がTs. ツェレンドルジ、松川に代わって8人が報告した。

- ◆E. ラブダン(モンゴル国立大学)「フフ帝国時代の歴史資料におけるモンゴルの地名を比定する重要性」
- ◆張國旺「新発見の神道碑と墓誌銘に基づく元ウルス時代の張弘略に関する文献学的研究」
- ◆L. Altanzaya アルタンザヤー(モンゴル教育大学)「『パクパ・ラマ伝』における諸記事について」
- ◆Temur トゥムル(南京大学)「元廷における「情動的忠誠心」——フビライ・ハーンのパスパ文字命令文再考」
- ◆Ts. Enkhchimeg エンフチメグ(モンゴル科学アカデミー歴史・考古研究所)「チャガダイ・ウルスと元ウルスの関係の問題について」
- ◆Park Jae-young パク・ジェヨン(韓国・中央大学校)「韓国高等学校の世界史教科書におけるモンゴルについての記述の分析」
- ◆D. Ider イデル(モンゴル国立教育大学)「トゥグストゥムル(オスハル)ハーンの歴史的特徴」
- ◆J. Lkhagvademchig ルハグワデムチグ(モンゴル国立大学)「他力から自力へ——フビライ・セチェン・ハーンが文殊菩薩の化身となった由」

分科会B：ユアン帝国の政治・法制・軍事史

第一部はJ. Gerelbadrakh ゲレルバドラフとJ. Kadyrbaev カディルバエフが座長を務め、8人が報告した。

- ◆B. Bayarsaikhan バヤルサイハン(モンゴル国立大学)「モンゴルのユアン・ウルスの法制史研究における諸問題」
- ◆Ts. Minjin ミンジン(モンゴル国・法執行大学)「ユアン・ウルスの法令の諸問題」
- ◆G. Bayarkhuu バヤルフー(モンゴル国立大学)「モンゴルの大ユアン帝国の政治組織・法令においてフビライ・セチェン・ハーンが行った刷新の特徴の研究」
- ◆L. Tur-Od トウル-オド(モンゴル国立大学)「フビライ・ハーンとモンゴルのユアン帝国の法令・裁

判制度の刷新」

休憩後、座長がKh. シャグダル、トゥムルに代わって、4人が報告した。

- ◆J. Bazarsuren バザルスレン(防衛大学防衛学研究所)「モンゴルのユアン帝国の軍事知識の伝統と発展について」
- ◆Li Zhian 李治安(中国・南開大学)「元朝皇帝の春秋の狩猟と「ショボーチ」、「グユチ」の役割の追究」
- ◆T. Erdenekhishig エルデネヒシグ(防衛大学防衛学研究所)「対宋襄陽・樊城戦におけるユアン軍の大砲隊が果たした役割」
- ◆Yu Lei 于磊(中国・南京大学)「宋元交替期の常州戦と後代の記憶——宋元交替の意味」
昼食休憩の後、第二部は座長がJ. Saruulbuyan サロールボヤン、于磊に代わり、4人が報告した。
- ◆A. Punsag ポンサグ(モンゴル科学アカデミー歴史・考古研究所)「フビライ・セチェン・ハーンが定めた王位継承・王位推戴式とその歴史的意義」
- ◆Yu. Boldbaatar バルドバートル(モンゴル国立科学技術大学)「モンゴル語におけるイフ・ユアン・ウルスの名称の伝統と変遷」
- ◆L. Munkhbayar モンフバヤル(モンゴル科学アカデミー歴史・考古研究所)「モンゴル帝国時代の貨幣用語sükes再考」
- ◆A. D. Gombojapov ゴンボジャポフ(ロシア科学アカデミー・シベリア支所モンゴル学・仏教学・チベット学研究所)「L. N. グミリョフの東洋研究業績」
休憩後、座長がボンサグ、李治安に代わり、3人が報告した。
- ◆D. Munkh-Ochir モンフオチル(教育文化科学省)「フビライ・ハーン時代の天文学・占星術(1260-1295)」
- ◆G. Batkhurel バトフレル、Ts. Gunbileg グンビレグ(モンゴル国立科学技術大学)「フビライ・ハーン時代の経済・経営思想の諸特徴」
- ◆A. Enkhbat エンフバト(モンゴル国立科学技術大学)「『世界征服者史』におけるフビライ・ハーンの記述」

以上、二日間にわたり、モンゴル国、ロシア連邦(トゥワ、ブリヤドを含む)、韓国、中国、台湾、日本からの参加者により、基調報告6本、分科会A報告24本、分科会B報告23本、計53本の報告が行われるという、極めて密度の高い国際学会となった。中でも韓国・済州島からの一連の参加者が目を引いていた。日本からの参加報告者は松川だけであった。

なお、会議中に複数のモンゴル人報告者から、「ユアン(元)ウルス」という漢字名の言い方を止めて「フフ・ウルス」と言い替えようという提案が出された。「元」という漢字には「青い(モンゴル語で「フフ」)」という意味があるからというのである。もちろん、13・14世紀の同時代資料に「フフ・ウルス」という用例は皆無であるが、いかにも現代のモンゴル人が発想しそうなことだと感じた。

10. 「大ステップ遊牧民とシルクロード」モンゴル・中国考古学協力十周年記念国際会議

International Conference on “Nomads of the Great Steppe and Silk Road” Dedicated to the 10th Anniversary of the Archaeological Cooperation of Mongolia and P.R.China

松田孝一(大阪国際大学名誉教授)

MATSUDA Koichi (Emeritus Professor, Osaka International University)

会議は、モンゴル国遊牧文明学研究所(International Institute for the Study of Nomadic Civilizations (IISNC))と中国内蒙古自治区文物考古研究所が共催したもので、2016年10月5日と6日の両日、ウランバートルのチンギス・ハーン広場(旧スフ・バートル広場)の東のCentral Tower 7階会議室(ウランバト中国文化中心)にて行われた。6日午前のセッション終了後、モンゴル国立博物館(Монголын Үндэсний Музей)で、2005～2014年間の両国共同考古調査10周年記念展覧会を参観し、午後冒頭に調査報告書が参加者に披露、配布された。以下プログラムに従って行事を記録しておく。5日の開会式は、A.オチル教授の司会で、教育文化科学副大臣のB.Tulgaの祝辞、中国大使館文化処の李薇の挨拶、ついでモンゴル科学アカデミー総裁B.エンフトブシンの祝辞があった。その後、両国の共同調査に功績のあった陳永志(中国内蒙古自治区文物考古研究所所長)にフビライ・ハン金メダルが授与され、参加者の写真撮影の後、研究発表に入った。

予定された発表者はモンゴル国18名、中国7名、ロシア3名、日本3名合計31名であった。各々の題目は以下の通りであるが、会議が当初8月の予定が延期されたため参加できなかった発表者も含まれている。

5日午前; 陳永志「中国モンゴル共同考古研究の回顧と展望」、A.オチル「ヘルメン・タルの3つの壁のある柔然墓」、Ts.Odbaatar「ウイグル貴人の陵墓研究」、B.アンフバヤル・Kh.ツェレンビャンバ「ザーン・ホシユーの契丹墓」。午後; D.トゥメン「中世初期モンゴル遊牧民の人類学」、N.バトボルド「ムナ山の岩画のいくつかの特徴」、Ts.トゥールバト「青銅器時代初期ケムチェック文化の岩画芸術」、オヨントルガ「モンゴルでの考古発掘で発見された木の保護と保存」、イェライエヴァ・イリーナ・E.「ブリヤートのアイデンティティ論における大ステップの文化遺産」、Ch.サランビレク「古代遊牧民の弓型首飾り」、程鵬飛「北朝関係遊牧民の用具の描画」、D.プレヴジャブ「墓壁画の蓮のモチーフ(5-8世紀)」、包桂紅「モンゴル高原の考古学発見とシルクロード」。6日午前; 松田孝一「チンギス・カン勃興期におけるモンゴル高原での西遼(カラキタイ)と金朝の闘争」、S.バートルガ「古代突厥、ウイグル文化とシルクロード」、黄曉芬「東西文明の古代道路の比較研究——秦の直道とローマ道」、A.エンフバト「突厥、ウイグル・カガン国時代のモンゴルの諸部族の経済状況とシルクロードの影響」、ブラエフ・アリェクセイ・I.「突厥彫刻の伝播の道としての大シルクロード」、(休憩)、Ts.エンフチメグ「モンゴル諸ハーンとムスリム商人」、ブライエバ・スヴェトラナ・V.「現代内陸アジアの博物館における大シルクロードの遺産」、L.エルデネボルド「オラーンヘレムの墓葬とシルクロード」。(国立博物館見学)。G.エルグゼン「匈奴と月氏関係に関する歴史史料と考古学資料」、Ch.エルール-エルデネ「匈奴の文化関係を解明する考古研究資料」。午後; (研究報告書の贈呈式)。エルデネバートル「遊牧民族の王、貴族の埋葬と犠牲の儀礼の諸問題」、宋国棟「遼代鎮州故城地理位置

考」、(休憩)、Ch.アマルトブシン「匈奴以後の歴史に関わる墓葬」、魏堅「牛川古城と北魏六鎮」、U.エルデネバト「モンゴル民族の鷹狩の伝統」、G.バトボルド「トルコ語の称号「sebig」の語源研究」。(討議)。オチル教授の総括があり、晩餐会が行われて散会した。

配布された報告書はモンゴル語版、中国語版の2種。Монгол улсын нүүдлийн соёл иргэншлийг судлах олон улсын хүрээлэн монголын үндэсний музей БНХАУ-ын өмөзо-ны соёлын өв, Археологи судлалын хүрээлэн (ed.) А.Очир, Та Ла, Чен Ён Жи et al, *Хүлхийн Амны I дөрвөлжингийн малтлага судалгаа (Монгол-БНХАУ-ын хамтарсан = Монгол улсын нутаг дахь эртний нүүдэлчдийн соёл иргэншлийн хайгуул, малтлага судалгаа= төслийн тайлан III)*, БНХАУ-ын соёлын өв хэвлэлийн хороо, 2015 ; 『蒙古国后杭爱省腾特苏木胡拉哈一号墓园发掘报告』

11. 「蒙古仏教与蒙藏関係研究国際学術討論会」

International Symposium on Mongolian Buddhism and Mongol-Tibet Relations

松川 節(大谷大学)

MATSUKAWA Takashi (Otani University)

2015年10月8日～9日、中華人民共和国北京市の中国人民大学国学館において、中国人民大学国学院と内蒙古伝統文化教育推広協会の共催により標記の国際会議が開催された。

10月8日10:00より国学館117室で開会式が挙行され、沈衛栄(中国人民大学国学院学術委員会主任)の司会により、オユーンビリグ(中国人民大学国学院副院長・教授)、張建明(中国人民大学常務副書記・教授)、淨空法師、張雲(中国蔵学研究中心歴史研究所所長・教授)、Vanchikova ワンチコワ(ロシア科学アカデミー・シベリア支所教授)、Dorj Wanchuk ドルジ・ワンチュク(ドイツ・フンボルト大学教授)、二木博史(東京外国語大学教授)がそれぞれ挨拶した。

写真撮影の後、11:20より、『蒙古文『大蔵経』』と『メルゲン・スム・モンゴル文読経集成』の贈呈式がオユーンビリグの司会で挙行され、郭惠珍(内蒙古伝統文化教育推広協会会長)、モンフバト(内蒙古仏教協会副主席・内蒙古包頭市メルゲン・スム活仏)が挨拶し、さらにモンフバト活仏とその弟子のダムジンが『メルゲン・スム・モンゴル文読経集成』のなかから数段を読経した。『蒙古文『大蔵経』』は、2007年より内蒙古社会科学院・内蒙古自治区新聞出版局の共編により、北京版モンゴル大蔵経ガンジョル部108巻(+目録巻1巻)、ダンジョル部224巻(+目録巻1巻)、ツォンカパ全書20巻、チャンキャ全書5巻、埋蔵経典41巻、計400巻が順次影印出版され、2014年に完了したものである。また、モンゴルの仏教寺院では、チベット語で読経するのが通常であるが、メルゲン・スムはモンゴル語で読経する伝統を有している。今般、内蒙古伝統文化教育推広協会の篤志により、これらのモンゴル仏典集成が世界各地の仏教寺院・図書館・大学などの機関に無償で献呈されることになった。今回、受贈の対象となったのは、中国人民大学国学院西域古典学系、内蒙古大学、五台山羅睺寺、五台山瑞応寺、台湾中央研究院歴史語言研究所明清檔案部、台湾法鼓台仏教学院、モンゴル国立図書館、アメリカ・コロンビア大学東アジア図書館、ロシア科学アカデミーシベリア支所モンゴル・仏教・チベット学研究所、カルムイク国立大学、ドイツ・バイエルン州立図書館、ドイツ・ハンブルグ大学、ハンガリー・エトヴェシ・ローランド大学、東京外国語大学、韓国東国大学の15機関であった。

昼食休憩後、14:15より沈衛栄の司会で第1セッションが行われ、3人が報告した。

◆S. Sečenbilig セチェンビリグ(内蒙古自治区図書館)「蒙古文『大蔵経』概述」

◆Orna Almogi アルモギ(フンボルト大学)「知られていないテンギユルとテンギユル編纂史においてそれが占める位置」

◆Agnes Birtalan ビルタラン(ハンガリー・エドヴェシ・ローランド大学)「ダヤン・デグレキ——モンゴル・チベット混成文化的の神格(テキストと画像)」

16:15よりBuyandelger ボヤンデルゲル(内蒙古大学)の司会で第2セッションが行われ、4人が報告

した。

- ◆沈衛栄「演撲兒法により歴史を救助する」
- ◆オユーンビリグ、孔令偉(コロンビア大学)「五色四藩」について——蒙蔵文化交融の一例」
- ◆楠木賢道(吉林師範大学)「江戸時代日本学者の蔵伝仏教研究状況」
- ◆陳崗龍(北京大学)「蒙蔵『目連救母経』と漢文目連救母故事の関係」

10月9日、08:30よりŠongqor ションホル/張双福(中国・内蒙古社会科学院)の司会で第3セッションが行われ、4人が報告した。

- ◆二木博史(東京外国語大学)「ツァガン・オブゴンの画像の分類について」
- ◆松川節(大谷大学)「モンゴル仏典の起源に関する諸問題」
- ◆Kürelbayatur フレルバートル(ドイツ・ケルン市)「1665年北京木版『金光明経』について——1720年北京版蒙文ガンジュール所収『金光明経』の原版の問題」
- ◆林士鉉(台北大学)「満洲文大蔵経中の『救護日食経』とその蒙蔵訳本との比較」

10:30より二木博史の司会で第4セッションが行われ、4人が報告した。

- ◆ワンチコワ「ロシア科学アカデミー・シベリア支所モンゴル・仏教・チベット学研究所東方写本木版本センター所蔵の一切経について」
- ◆ションホル「『極楽世界莊嚴経』校勘記」
- ◆Irina Garri ガルリ(ロシア科学アカデミー・シベリア支所)「チベットとブリヤド・モンゴルの関係」
- ◆Sayjiraqu サイジラフ(中国中医科学院中国医史文献研究所)「蒙蔵民族文化交流史における蔵医古文獻」

昼食休憩後、会場を国学館122室に移し、14:30より趙令志(中央民族大学)の司会で第5セッションが行われ、4人が報告した。

- ◆ボヤンデルゲル「アオハン旗五十家子白塔の1600～1603年蒙漢文碑銘の研究」
- ◆金成修(韓国・国立ソウル科技大学)「蒙蔵関係と河西」
- ◆趙令志「乾隆末年サインノヤン部エルデニパンディタホトクト転生事件考」
- ◆石岩剛(中国・陝西師範大学)「清朝によるサンゲェギャンツォへの王号封賜と5世パンチェンの北京招聘についての考論」

休憩をはさんで16:25より郭恵珍の司会で閉会式が行われ、オユーンビリグによる学術総括ののち、会議参加者の自由発言があり、最後に沈衛栄が閉会の辞を述べた。

今般、世界各地の15の機関が受贈した『蒙古文『大蔵経』』は、例えば日本国内においては、すでに大谷大学、京都大学、国際仏教学大学院大学などが購入しているが、購入価格は一セットで300万円を越えていた。このような大冊が郵送費も含めて無償で提供されることは、「法施」と捉えるべきことであろうが、モンゴル大蔵経研究の発展に多大な寄与となることは疑いない。施主の郭恵珍女士によると、今回の敬贈は第一次であり、今後も世界各地の機関に寄贈を行いたいとのことであった。

一方、会議の内容としても、モンゴル大蔵経の伝存状況、版本の諸問題、チベット大蔵経との関

連などの観点から有益な情報もたらされ、モンゴル大蔵経研究における課題が共有されたことは有益であった。特に、内モンゴルとブリヤドにおけるモンゴル大蔵経の伝存状況についての報告は、新たな情報が含まれていて興味深かった。残念だったのは、モンゴル国からの報告者がいなかったことである。

なお、この『蒙古文『大蔵経』』については、拙著「モンゴル大蔵経」『書香』（大谷大学図書館・博物館報）32号、2015年、pp.2-3. (http://www.otani.ac.jp/kyo_kikan/library/nab3mq0000040hez-att/nab3mq0000040hjpg.pdf) を参照されたい。

12. 楊志玖先生生誕100周年記念隋唐宋元時期の中国と世界に関する国際学術研討会

International Conference on China and the World during the Period of Sui, Tang, Song and Yuan in Memoriam Professor Yang Zhijiu (1915-2002) ; 紀念揚志久先生誕辰一百周年隋唐宋元時期的中国与世界国际学术研讨会

松 田 孝 一 (大阪国際大学名誉教授)

MATSUDA Koichi (Emeritus Professor, Osaka International University)

会議は、モンゴル、元朝史等の研究で著名な楊志玖先生の生誕100年を記念して、南開大学、中華書局、中国唐史学会、中国元史研究会、《歴史教学》社の主催で、天津の南開大学を会場として10月10日と11日の両日行われた。筆者は楊志玖先生と何度か学会等でお目にかかったことがあり、その縁で参加した。日本からは櫻井智美氏(研究発表題目「元代江南祠廟与地方士人——以南海神廟為中心」)が出席、關尾史郎氏は寄稿(『随葬衣物疏与鎮墓文』補説——以『唐顯慶元(656)年宋武歆移文』為中心)のみの参加であった。10日午前9時から芸術大樓1階の報告庁で南開大学歴史学院院長の江沛教授の開幕の辞、『楊志玖文集』(全5冊)のお披露目、参会者の記念撮影、中国唐史学会会長梁国棟教授、中国元史研究会名誉会長陳高華先生はじめ各方面からの祝辞、挨拶があり、楊志玖先生のご家族の天津師範大学歴史文化学院の楊西雲教授の答礼の辞があった。続けて同会場にて、「大会」第1セッション(第1場)として榮新江「從粟特商人到馬可波羅」、姚大力「中国歴史的族群与国家觀念」の2題の研究発表が行われた。

午後から省身樓の3か所の会場(教室)の分科会が行われた。研究発表の総数は、プロシーディング(『會議文件』総465頁)の目次をたどると「大会」学術報告4件、「分科会」71件で、ペーパーのみの寄稿者を含めて計78件に及んだ。分科会は、コメンテーター(評論人)が発表終了後に講評し、その後質疑が展開され、システムティックに運営されていた。楊志玖先生には、『隋唐五代史綱要』、『元史三論』、『馬可波羅在中国』、『元代回族史稿』、『陋室文存』等の書がある。プロシーディングは、先生の研究範囲を反映して「楊志玖先生治史与学術貢獻」という先生の個人、研究者としての人物史や御経歴に関して10人の発表が連ねている他、「隋唐史研究」、「宋史研究」、「元史研究」、「6-14世紀的中外關係」等の区分で発表が配列されている。第1分科会は、先生の人物史、来歴と隋唐～宋史関連の研究が配置され、第2、第3分科会がモンゴル・元関連で、中外關係は第3分科会に含まれていた。分科会終了後、閉幕式となり、大会第2場として洪金富「元典章問題人名札記」と松田孝一「金朝、西遼在蒙古高原的攻防及成吉思汗的興起」の発表があり、最後に主催者側から李治安、王曉欣両教授が発言し、終幕した。

プロシーディングから元史研究として、紙幅の關係から筆者の関心を引いたもののみを列記すると、「籍没」刑へのモンゴルの影響を述べた李治安「元江南地区籍没及其社会的影響新探」、『大元通制』、『至正條格』により元代法体系の歴史的な位置づけを行う吳志堅「元代的法律及其在中華法系中的地位」、元の死刑執行方法の實際とモンゴルの影響を指摘する武波「“敲”与“絞”——元代死刑法式再考」などの法制、「天下第一道」の監察機關を考察した葛仁考「元代燕南河北道肅政廉訪司考述」、「新附軍」の軍戸管理を新出の戸籍簿書により論じた王曉欣「關於元代新附軍戸管理制度幾段新材料

探析)、忠翊侍衛親軍の大同附近とその北方の屯田の変遷や関連地理及びモリン道の漠南交通を詳細に考察した石堅軍「“忠翊侍衛屯田”雑考」、ナリン道の一站の位置の新説を提起した胡小鵬「黄兀児月良站方位再考」、元末全真教指導者の履歴に関する新知見を提示した劉曉「元代全真道后期被遺漏的一位掌教——《井公道行碑》読後記」、『宛署雜記』所載の、廉希憲邸、万柳堂に建てられた寺所在の白話碑を解説した張良「弘教普安寺聖旨碑發覆」、北京故宮博物院所蔵印の真贋に関する薛磊「“太師国王都行省之印”献疑」、駅伝での利用者への支応を黒水城文献から検討した張国旺「元代站赤登記簿再釈」、イスンゲ碑に見られる「モンゴル・ウルス」以後、モンゴル人が「国」をどのように表現したか、また周辺国家をどのように表現したのかを議論した烏蘭「蒙古文歴史文献中涉及“国”及相關概念的一些表述方法」、オングトの来源を呼和浩特新発見史料や敦煌文書等により西ウイグル国ソグド系ウイグル商人・景教徒との関連を述べた白玉冬「絲路景教与汪古源流——呼和浩特白塔回鶻文題記釈読」、イルハン国へ奉使して元に戻らなかったボロド丞相について袁桷『清容居士文集』卷32、「鄭公行状」の記事にもとづく新見解を示した張帆「孛羅史事臆解」、フビライの外孫、高麗忠宣王の長期の大都留在の経緯や随行人員の元朝文人との交流を論じた烏雲高娃「高麗忠宣王及其随行人員在元朝的活動」、フビライの統治理念の「収服人心」を分析した特木勒「從伊斯坦布爾大学図書館蔵八思巴字遺旨看忽必烈治国理念」があり、またその他多数の優れた研究が見られ、若手研究者も多く『元史』研究の今後の発展を感じさせるものがあった。

13. 国際会議「ゲルゲ／パイザ——ヒジュラ暦7-8世紀／西暦13-14世紀におけるアジア文明の価値」
International Conference “Gerege/Paiza - Values of Asian Civilization in the 7th-8th Century of Hijry/13th-14th Century”

四 日 市 康 博(早稲田大学中央ユーラシア歴史文化研究所)

YOKKAICHI Yasuhiro (Institute of Central Eurasian History and Culture, Waseda University)

モンゴル国科学アカデミーとイラン・イスラーム共和国外務省国際研究・教育センター共催の国際会議「ゲルゲ／パイザ——ヒジュラ暦7-8世紀／西暦13-14世紀におけるアジア文明の価値」は2015年10月28日から29日にかけてモンゴル国外務省で開催された。モンゴルとイラン両国の共催であることからわかるように、本会議はモンゴル帝国期でも主にモンゴル高原とイラン方面との関係に焦点を当てたモンゴル・イラン間の国際共同研究・学術交流に基づく国際会議である。したがって、会議への参加者はモンゴルとイランの研究者が多数を占めたが、その他にも、インド、トルコ、ロシア、カザフスタン、中国、韓国、そして、報告者の日本と全9カ国の専門家が参加しての会議となった(ただし、インドからの報告者マンスーラ・ハイダルMansura Haidar教授は欠席のため未報告)。筆者が本会議に招待されたのは、現在、筆者を代表とするイラン・中国・日本の3カ国間でのモンゴル帝国期多言語文書研究プロジェクトの活動成果、特にイラン国立博物館所蔵のアルダビール文書研究に関してイラン国立博物館と共同研究協定を結んで研究成果を国際的に発信していることをモンゴル・イランの双方の研究者から評価していただいたためである。会議を主宰するモンゴル国科学アカデミーの総裁エンフトゥヴシンEnkhtuvshin氏からはモンゴル国・イラン・インドの間で進行中の共同研究プロジェクトに私たちのプロジェクトも協力してほしいこと、また、各国とも外務省など政府機関と連携しての協力体制であるため、日本側も外務省や政府とも連携して協力体制をとって欲しいことなどの要請を受けた(もともと、私個人は政府関係とのコネクションは全く無いため、この点は誰か他の然るべき人物に要請していただかないと無理ではあるが)。また、モンゴル国科学アカデミーの歴史考古研究所および国際研究所の主だった研究者を紹介していただいたが、なかでもテムルトゴウTumurtogoo氏をはじめ数名の研究者は筆者の研究および私たちのプロジェクトの成果に強い関心を示してくださった。モンゴル国立大学などアカデミー以外の研究者も数名参加していたが、今回は関係者および招待者のみのクローズドの会議であったため、わざわざ筆者の報告を聞きに訪れてくれた数名の国立大学の研究者は立ち入りを許可されず、会場ではお会いすることができなかった。

イランからの参加者のうち、テヘランでよくお世話になっているモンゴル史専門家のモフセン・ジャアファリー・マズハブMohsen Ja'fari Maz'hab氏(国立文書館)は残念ながら急遽欠席となってしまったが、若手のモンゴル史研究者であるザンジャンン大学のマスウード・バヤートMas'ud Bayat氏とは様々な情報を交換できた。彼の大学はモンゴル期の遺跡・史跡が多く残り、オルジェイト廟があることで有名なザンジャンン州にあるため、今後もモンゴル・イラン間の学術交流の軸の一人となる人物であると目される。また、ダーイヤトル・マアアーレフェ・ボズルグ・エスラーミー(イスラーム大百科)研究所のアリーレザー・バフラミーヤーン'Alilezah Bahramīyān氏、ファルハンゲ

スターン(イラン学士院)のマスウード・ファルヤーマネシュMas'ūd Faryāmanesh氏、ミーラーセ・マクトゥーブ出版社の会長であるアクバル・イーラーニー・ゴンミーAkbar Īrānī Gonmī氏などイランの歴史学界の要職にある錚々たる面々が参加され、それぞれ親交を結ぶことができたのは、筆者にとっても私たちのプロジェクトにとっても幸運なことであった。

当会議はモンゴル国立博物館で開催された展覧会「イルハン朝」Il Khanid Dynasyと並行して開催され、会議に先だって参加者は10月27日の午後に開催された同展覧会の開会式に招待された。ちなみに、筆者は最初誤って国立歴史博物館へ足を運んでしまったが、大統領府の建物内に併設されている国立博物館のほうが会場であった。開会式には日本大使館を含む各国の大使や関係諸氏が招待されており、主宰者・貴賓の挨拶などの後、各自展示を観覧して解散となった。展示のほうはモンゴル帝国期・元朝期に関しては直前に国立歴史博物館で開催された「セチェン=フビライ=ハーンの遺産展」でも展示された遺物の一部が展示されていたが、肝心のイルハン朝の遺物に関してはコインを除いてモンゴル国にはほとんど文物が所蔵されていないことからミニアチュールや文書史料などの写真展示が大半を占め、アカデミックな意味では水準が高いとは言いかねる展示内容であったのは少々残念であった。

会議は27日の午前中から28日の午前中まで、バンディ氏R. Bandii(モンゴル国科学アカデミー国際協力部長)、メフルダード・キアーイー氏Meheda Kiaei(イラン外務省参事官)、私の三名が半日ごとにチェアとなって進められた。モンゴルからは主に科学アカデミーの研究者および若手研究者が報告をおこなった。そのうちの一部のみ列挙すると、以下のようなものがある。

Masoud Bayat (Zanjan Univ., IRI) “An Overview of Rising and Falling of Soltanieh as Capital.”

Yasuhiro, Yokkaichi (Waseda University) “Ardabil Document Studies and the Research Project between Iran, China, and Japan: Introduction of Some New-found Documents in Mongolian and Turkic Writings.”

Chen Yongzhi (Institute of Cultural Relics and Archaeology, Inner Mongolia, China) “A Study on the Gerege (Paiz) of Mongolian Period.”

Nolev, E.V. (Institute of Mongolian, Buddhist and Tibetan Studies of Siberian Branch of the Russian Academy of Science, Russia) “The Jarliq and the Gerege / Paiza: The Features of the Integration of Rus' Principalities in the Political Space of the Mongol Empire.”

Masoud Faryamenesh (Academy of Persian Language and Literature, IRI) “Buddhism in the Ilkhanid Period.”

Ts. Enkhchimeg (Scientific Secretary for Social Sciences of MAS) “Relationship between Chagatay's Ulus and Ilkhanid.”

Ts. Battulga (National Univ. of Mongolia) ““Cerāhiyyet'ül Hāniyye” or Surgical Scripture of Il-Khan Dynasty.”

A. Enkhbat (Mongolian Univ. of Science and Technology, Mongolia) “Origin of the Gerege.”

B. Ariyajav (N. Univ. of Mongolia/ MA) “Arabic Texts of a Treaty of Nur ad-Din Foundation of 1272.”

今回の会議のテーマとなったいわゆる「パイザ」paizah、モンゴル語でいう「ゲレゲ」geregeは一見、特殊限定的な問題に見えるかもしれないが、かなり広い範囲で様々な問題に関わってくる。それはモンゴル帝国において各種の許可証として使用された牌符であり、イラン=イスラーム世界で

「パイザ」paizahと呼ばれるのは漢語の「牌子」がそのまま音写されたものである。それは、すなわち、モンゴル帝国期から元朝期にかけて使用された牌符が西方に伝播したことを意味している。パイザはイル=ハン国のみならず、モンゴル帝国全域においても使用され、その使用範囲はユーラシア規模の広がりを持っていた。現存するパイザの牌面に刻された文体はウイグル文字モンゴル語・パクパ文字モンゴル語のみならず、漢語やアラビア文字ペルシア語が併記されたものもある。したがって、パイザそのものだけを見ても、モンゴル帝国史、元朝史、ジュチ=ハン国史、チャガタイ=ハン国史、イル=ハン国史、さらには各政権の継承国家など多角的な立場からの検討が必要であり、モンゴル帝国期の東西ユーラシアに共通する現象のひとつとして捉えられる必要がある。加えて、パイザはモンゴル帝国の駅伝制度、軍制、文書制度などとも密接な関わりがある。モンゴル帝国がチンギスの息子たちのそれぞれのウルスに分裂した後もそれら諸制度は一定の共通性を持っていたが、パイザは諸ウルスの共通構造や相互関係を解明する手掛かりともなり得るのである。

数ある発表の中で、内蒙古文物考古研究所所長のChen Yongzhi(陈永志)氏の報告は考古学的見地から中国、モンゴル、ロシアなどで出土した19件のパイザからパイザの形状、材質、種類、用途などを検討したものであった。Chen氏の報告はあくまでも考古学的な側面からのものであり、歴史学的な研究を十分に反映させたわけではなかったが、既存の文物資料を網羅的に整理分類した点で重要な報告であった。歴史学側でも最新の考古学研究成果に対応した形で改めて研究がなされる必要があるだろう。今回、イランからの研究者の発表ではパイザを直接扱ったものは無く、ほとんどはイランのモンゴル時代史やモンゴル文化を扱ったものであったが、これはイランでパイザの現物は見つかっておらず、アラビア語・ペルシア語を主体としたパイザの存在が知られていないことからほとんど研究対象となっていないことによる。しかし、ペルシア語やアラビア語の編纂史料中にもpaizahの語は頻出することから、今後、考古資料、漢語史料側からの研究に加えてペルシア語・アラビア語史料の側からのアプローチがおこなわれる必要がある。

一方でパイザは君主の勅令、すなわち、モンゴル語の「ジャルリグ」*jarliq*、トルコ語・ペルシア語の「ヤルリグ」*yarliq/yarlıgh*とも密接な関係を持っていた。なぜなら、パイザは単独で発給されるわけではなく、漢語では「執把聖旨」や「護持聖旨」と呼ばれる携帯を前提とする勅書と共に発給されていたからである。この問題を扱ったのが、ロシア科学アカデミーシベリア支部のノレフ氏であり、現在に至るソ連・ロシアにおけるヤルリグ研究との関係から報告をおこなった。また、筆者の報告も勅書との関係からパイザを扱ったものであり、イルハンのヤルリグ(モンゴル語では「ウゲ」と表記される)の文中では「朱印付勅書と金牌」*altamgatai jarliq, altan gerege*という表現が定型句として使用されており、それがアルダビール文書中にも見られることに言及した。

このように、パイザをめぐる問題は、パイザそのものの形態や機能の問題に留まらず、モンゴル帝国期命令文書の共通様式の問題や、発令過程・発給処理の問題、発給された命令文書の所持と権威保持の問題、さらには駅伝システムの問題や外交関係などにまで関わっている。すなわち、モンゴル帝国期の東西ユーラシアに通底するモンゴル・システムの端的な事象のひとつであったパイザを通して各地域を見ることにより、ユーラシアに共通するモンゴル・システムの構造や地域によるシステムの変容、地域間の相互関係が見えてくるのである。本会議において必ずしもパイザをめぐる諸問題に対して新たな知見が示されたとは言えないが、モンゴルとイランにおける研究を軸とし

て各国の研究者が最新の研究材料や研究視点を持ち寄ったことにより、パイザをめぐる研究は新たな段階を迎えたと言っていることができるだろう。モンゴルとイランの共催による国際会議は両国の共同研究プロジェクトと並行して今後も開催される予定であり、次回は宗教をテーマとして来年開催される予定である。

追記：今回の会議参加に際しては、大谷大学の松川節氏に仲介の労をとっていただいた。この場を借りて改めて御礼申し上げたい。

